

学校説明会2020 初等部の教育内容

教務主任を務めます小野裕司です。

「初等部の教育内容」というテーマで、青山学院初等部の教育を説明いたします。別ページ資料の内容とリンクしておりますので、併せてご覧ください

学級と校舎

本校の校舎の造りは、大きく分けて1年生から4年生の教室がある低学年中学年の校舎、低中学年棟、5・6年生の教室がある高学年棟に分かれています。その二つの校舎を結ぶ位置に特別教室、音楽室・図工室・英語室・学習センター・コンピュータ室があり、教科独自の工夫された造りになっています。「学習センター」は図書室の役割を果たします。なお、学習センターは1・2年生専用の「低学年学習センター」が別に1年生の教室横にあります。

学年の特色

低学年・中学年・高学年 基礎・基本 本物に触れて感性を育てる

資料の中に、「基礎・基本」という言葉が何度か出てきています。「基礎・基本」とは、国語や算数でいうなら「読み書き計算」に当たるものです。

実際におこなっている例として、国語でいうなら、1年生の最初は、平仮名の読み書きから始めます。いえ、実際の授業は、鉛筆の持ち方や、鉛筆を使っての線の引き方から始まります。正しい鉛筆の持ち方で、線引き遊びをして、鉛筆の使い方に慣れていきます。そして、平仮名の読み書き。もうすでに、平仮名の読み書きができているお子さんもいます。幼稚園によっては、意図的に文字を教えるところもあるとお聞きします。それでも、私たちは、全員に一から平仮名を学ばせます。平仮名の学習も、書き方は、「あ・い・う・え・お」と五十音順に進めていくのではなく、「く」や「し」といった1画で書く形の取りやすい字から練習します。1画が終わると「い」や「す」の2画の字に進みます。たっぷり2か月をかけて平仮名の読み書きを学びます。この間に、子どもたちの書く文字は、驚くほど整ったいい形の文字になります。こんな形で、「基礎・基本」の文字の学習は始まっていきます。

文字の学習については、その一つに、4年生で毛筆習字をおこないます。本校では、毛筆の習字は4年生の1年間しかおこないません。しかし、その指導は、専門の書道家の先生を講師にお招きして、1年間通しておこないます。毎回の授業の最初は墨をするところから始めます。多くの学校では、効率を上げるために、墨はすらずに墨汁を使うようですね。本校が創立以来大切にしている「本物に触れて感性を育てる教育」の一端がこういう小さな所にも表れています。習字の授業では、教科書に出ているような文字だけでなく、象形文字や隷書体の文字、また、小筆を使って文字を写し取るというようなこともおこないます。毛筆の基本である筆の穂先の使い方は、講師の書家の先生が丁寧に教えます。使

う道具も、江戸時代から続く老舗、平安堂が初等部生のために特別に作ってくださった筆、こちらも本物を使います。この毛筆習字は、4年生から少し時間をおいて、本学の中等部や高等部の書道の時間に、同じ先生から教わります。高等部では、王羲之や三蹟の書を手本に書くそうです。小学校だけで終わるのではなく、その先も同じ視点で活動が続いていくというところも、本校の一貫教育の特徴の一つです。

この「本物に触れて感性を育てる教育」、その一つが図工で使っている絵の具です。美しい本物の色を感じるために、子どもたちが使う絵の具は、一般の学校で使われるような工場で大量生産される絵の具ではなく、職人が自然の素材から一つ一つ手作りする絵の具を、銀座の月光荘という古い画材店が用意してくださり、これを1年生から使います。卒業後も、本学中等部で引き続き使います。

校内各所にはそうして描かれた児童の絵が展示されています。その発色を見て頂ければ、本物の色の価値がお分かりいただけるかと思えます。

さて、学習の「基礎・基本」は、国語や算数だけにあるわけではなく、すべての教科にその内容があります。

例えば音楽では、「美しいハーモニー」を基礎基本の一つに据えています。二部合唱、四部合唱の練習をおこない、ハーモニーを作る楽しさを味わっています。授業で身につけたハーモニーは、毎日の礼拝の中で、讃美歌を美しいハーモニーで歌っていくことに結びついています。

また、体育では、「水泳」を基礎・基本の一つに据えています。都会の学校で校庭があまり広くないことを逆に生かして、プールを「水のある体育館」と考え、一年を通して水の中で運動したり泳いだりしています。本校のプールは、深さの調節ができる可動式の底になっていますので、1年生の最初は、深さ10cmに設定して「水で遊ぶ」「水を顔にかける」というところから始めます。たっぷり1年かけて、泳ぐという形にしています。水泳というと、「速く泳ぐ」とか「タイムを競い合う」ということに目がいきますが、それだけではなく、本校の体育では「ゆっくり長い時間泳ぐ」ということも学ばせます。それが5年生でおこなう海での遠泳につながりますし、6年生でおこなう服を着たまま泳ぐ「着衣泳」につながります。

このように、本校では、どの授業でも、その教科の「基礎・基本」をはっきりさせ、それを中心に学習を進めています。

今、教育の世界では、「21世紀型学力」とか、「アクティブラーニング」という言葉がしばしば出てきます。今までの学校教育、「先生から問題の解き方を教わる」というのではなく、生活の中でしばしば出てくるような、いわば正解のない問いに対し、子どもたちがどう考えどう取り組むか、ということが、「21世紀型学力」や「アクティブラーニング」の中心課題になっています。文部科学省はこれを「生きる力」と呼んでいます。今、

小中学校の教育の世界では、基礎・基本だけではなく、この「生きる力を育てる」ということから、「学習の活用や発展」、また「判断力や思考力を育てる」といった内容を、授業で扱う動きになっています。多くの学校で、授業の中でこれらの内容を扱うべく、苦勞しています。

これは、国際学力テストで日本の小中学生の成績が年々下がってきている、特に、学習したことを活用する力や、自分の考えをまとめ表す力の不足が目立っている、ということから、このような動きになっています。文部科学省から出された新しい学習指導要領でもそのことが強調されています。

しかし、私たちの学校では、その動きに全面的に合わせることはしません。教室の授業では、あくまでも「基礎・基本」を繰り返し学習します。子どもたちのこれからの学習の土台、学習の足腰をしっかりさせることが何よりも大切だと考えているからです。

では、本校では、「学習の活用や発展」、「判断力や思考力」、また、「21世紀型学力」「アクティブラーニング」はどう扱っているかといいますと、校内の活動では「総合活動」という「働くことを学ぶ時間」にその役割を持たせています。

また、学校を離れた活動の、宿泊行事の中で「学習の活用や発展」、また、「判断や思考の学習」、そして「アクティブラーニング」がおこなわれます。宿泊行事については、後ほど詳しく触れます。

日常評価と三者面談

資料「三者面談」のところに、『成長の記録』という名前が出てきます。

本校には通知表、いわゆる通信簿はありません。通知表に代わる評価のあり方を工夫し、現在では、『成長の記録』という形で評価を残しています。子ども・保護者・担任の三者で、子どもが今できていること、できていないこと、次の課題、この三つを確認し、それをこの『成長の記録』に書いていきます。学期末に先生からもらう単なる評価、いわば決算書ではなく、この先、子どもと保護者と担任が同じ方向を向いて進んでいくための物、それが『成長の記録』です。

宿泊行事

・宿泊行事と生活・学習

宿泊行事はわが校の大きな特徴の一つで、1年生から6年生までの50日近くの宿泊行事を経験します。これだけの行事をこなすのは、参加する子どもたちも、実施する私たち教職員も、また、子どもを送り出す保護者の方々も、多くのエネルギーが必要です。時間も労力もお金もかかります。そうまでしておこなう本校の宿泊行事、その価値について詳しく説明します。

宿泊行事の価値は大きく二つに分けられます。一つは、「生活力や社会性を育てる」と

いうことに関する「生活面の価値」。もう一つは、「学習の『活用・発展』また、『思考力・判断力』を伸ばす」ということに関する「学習面の価値」です。

・宿泊行事の価値：生活的側面

まず、宿泊行事の「生活面の価値」について、説明します。

本校の宿泊行事、どれもとても楽しい行事ですが、決して物見遊山に行くわけでも、豪華で快適な旅に行くわけでもありません。家庭を離れ、親元を離れ、集団の中で、自分の力で生活していく力をつけることを目的としています。

「親元や家庭を離れる」のですから、自分だけのペースで過ごせる快適な生活の場がなくなります。

「集団の中ですごす」のですから、自分のわがままは通じません。周りの友だちとうまく関係を作っていけないと生活できません。

「自分の力で生活していく」のですから、衣食住について自立できなければいけません。着る物の管理、食べ物の食べ方、生活する部屋の環境の整え方などの練習が繰り返されます。

私たちは、宿泊行事を、「生活訓練キャンプ」と呼んでいます。

6年生の宿泊行事、「洋上小学校」を引率すると、最終日、東京に帰ってきて船を降りる最後の式の中で保護者に向けて挨拶をします。その時、私は、いつも、「楽な旅ではありませんでした。子どもたちの困難やトラブルも、たくさんありました。それでも、子どもたちは、だれ一人へこたれず、逃げ出さず、最後まで踏ん張って、今帰ってきました。」と話します。

これ、子どもたちは6年生で急にできるようになるわけではありません。1年生の「なかよしキャンプ」から始まって、毎年の宿泊行事で、少しずつ練習し、学び、慣れていきます。1回や2回の宿泊行事では、力は付きません。毎学年、場所を変えながら、繰り返し、繰り返しおこなわれることで、子どもたちの生活力や社会性は育っていきます。

その結果、「親元を離れても、生活をやり遂げる力」が付き、どんな場でも他の人と協力し、また、どんな人と一緒になっても自分を見失わない、いわば、「人間関係を作っていく力」になっていきます。まさに、「生きる力を育てる」「アクティブラーニング」の実践になっています。

これが、宿泊行事の生活面の価値です。

・宿泊行事の価値：学習的側面

次に、宿泊行事の、「学習面の価値」についてです。実際にあった事例をいくつか説明します。

事例1：2年農漁村の生活 南房総で

何年か前、私が2年生の担任をしていた時のことです。「秋の農漁村の生活」で、春に植え付けたサツマイモを収穫しました。子どもたちと、取れたサツマイモの大きさ比べをしました。見た目の大きさで比べていたのですが、その時の子どもたちはそれではどうしても納得しなくて、きちんと量って決めようということになりました。急遽、秤を用意して重さを量って比べました。単純な「大きさ」という感覚から「重さ」という科学的概念へと子どもの認識が進歩したわけです。さらに、「何g」という数字に表れる形になったため、今度はグループ全体の合計で比べ合おうとなり、それぞれのサツマイモの重さの足し算を始めました。三桁の足し算は算数の時間にやっていたのですが、取れたサツマイモの数だけ、足し算を何十回も続けていくわけです。子どもたちは悪戦苦闘しながらも楽しそうに計算していました。

渋谷の学校でおこなった基礎・基本の学習が、活用され、大きく発展していきました。

また、別の年の「農漁村の生活」では、畜産農家に牛・豚・ニワトリを見に行きました。「農漁村の生活」で行く南房総は畜産も盛んな場所です。せっかく見に行くので、学校へ帰った後で図工の時間に絵を書いたり、粘土で作ったりしようと計画しました。現地ですらいいかと図工の専門教員に相談をしますと、「スケッチを書かせるといい。スケッチは全体を描くのではなく、絵にならないバラバラでもいいから、手の先とか目とか、部分をしっかり見て書いてきた方がいい。」とアドバイスをもらい、現地でもそのようにさせました。そして、帰ってきてからの授業で作った作品。豚を粘土で作った子、形は決してバランスよく作れたというわけではなかったですが、見事な鼻の形を作りました。漫画に出てくるような丸くてちょんちょんと穴が空いているような鼻ではなく、すっと前に突き出ている本物の豚の鼻の形でした。ニワトリの絵を書いた子、ニワトリの足、爪の先の鋭い形や細かい筋までしっかりと書いてあって見事でした。大人でもこんなには書けないねえ、と感心したのですが、どういう訳かその子は足を4本書いていました。爪の先のところばかりじーっと見ていたので、本数には思いが行かなかったのでしょうか。こういう失敗がしばしばあるのも私たちの学校です。

宿泊行事で学んできたことが、渋谷の学校の授業で活用されました。

事例2：3年生山の生活 黒姫高原で

何年か前、私が3年生の担任をしていた時のことです。10月の「山の生活」で、長野県の黒姫高原へ行きました。その時のプログラムの一つに、ナイトハイキングをしました。夜、真っ暗になった森に入って行き、シートを敷いて横になり、じっと息を凝らし、森の気配を感じ取るというプログラムでした。森に住む小動物の多くは夜行性です。じっと静かにしていると、目で見ることにはできないのですが、小動物の小さな鳴き声や、小さな音、すぐ近くに何かの気配があることが感じられます。その場では、一切音を立ててはいけない約束なので、森から出て、ロッジに戻ってから、子どもたちと何がいたか、話し合いました。「タヌキみたいのが私のすぐ近くにきました。」と言った女の子。「何かは見えない

かったけど、生き物がボクの横を通った音がしました。」と言った男の子。「私のすぐ横に、こんなに大きな生き物が来て、じっと座ってました。」などなど。ホントかー、というような話もありましたが、子どもにはトトロが見えるというのは、そうなのかもしれません。

そんな時、一人の子が、「ずうっと遠くの方から、ゴーーーーッていううなり声のような音が聞こえました。」と言いました。実はその音、高速道路を走る自動車のタイヤの音です。森から直線距離にして 2・3km の所に上信越道が通っていて、その音が聞こえてくるのでした。日中、普通に活動をしていると全く聞こえてこないのですが、夜の森に入って、気配に耳を澄ましてしーんとしていると、高速道路の音は地鳴りのような響きになって聞こえてきます。私も、森の中で、その音がとても気になりました。「あれは、高速道路の自動車の音だよ。」と話すと、子どもたちは、「エー」とビックリします。「森の生き物たちにも聞こえてるのかなあ。」「あの音聞いて恐くないのかなあ。」「自動車のライトにびっくりしてひかれちゃう動物もいるよねえ。」などなど。「高速道路なんて、無ければいいのにね。」という子も出てきます。「でもねえ、みんなだって、その高速道路を通ってここに来たんだよ。」と話すと、子どもたちは、「うーん」と考え込んでしまいました。

環境についての学習は、生活の授業や、社会、理科の授業で一通り学びます。しかし、渋谷のキャンパスの中では、理解させることが難しい内容も少なくないです。「森」というもの一つをとってみても、渋谷のキャンパスの中では、言葉の上でしか分からないことでしょう。それを、子どもたちは、黒姫の夜の森で、高速道路の便利さとその影響について、一瞬のうちに感じ取り、理解し、それを自分の言葉で表現することができました。学習の活用・発展です。

事例 3：6年生洋上小学校 五島列島福江島で・北海道納沙布岬沖で

6年生の「洋上小学校」ではこんなできごとがありました。

その年の洋上小学校では、長崎県の五島列島福江島に寄りました。出発する少し前に、福江島の小さな入り江にイルカの群れが迷い込み、浅瀬に乗り上げて動けなくなったイルカを島民たちが捕まえ食べてしまったというニュースが外国のメディアで取り上げられ、イルカを殺して食べる野蛮な人々というように報道されました。以前に和歌山県のイルカ漁の様子を撮った『コーブ』という映画がアカデミー賞を取り、その後もイルカ漁のことは外国のメディアでよく話題になります。その年、福江島で子どもたちが乗ったバスが、イルカが乗り上げた入り江の近くを通った時、バスのガイドさんが、「あそこがニュースになったイルカが乗り上げた入り江です。実はその時のイルカの肉、私も食べました。」と話してくれました。その若いガイドさんは、入り江近くの集落で生まれ育ち、しばしばイルカが入り江に迷い込んできて、沖へ追い出そうとしても決して出て行こうとはせず、そのうちに弱って死んでしまうということでした。仕方がないので、漁師さんたちが捕まえて、その肉は集落の家々に、自然からの恵みとして配られる、ということでした。

た。「イルカの肉を食べるのって、私たちには子どもの時からのごく普通のことなんです。」というガイドさんの言葉を、子どもたちはしーんと聞き入っていました。

東京で報道されること、それは真実のことでしょう。でも、現地に行き、その場の人々の生活を見て、話を聞くと、また別の真実が表れてきます。同じ一つのできごとでも、見方によって、正反対の感じ方をしてしまうんだ、ということに、子どもたちは気づきます。

また、別の年「洋上小学校」ではこんなできごとがありました。

その年の洋上小学校では、北海道の東の端、納沙布岬の沖まで行きました。日本で一番早い日の出を見ようという目的でした。その学年の子たちは、4年生の時に「山の生活」で、早朝登山をおこない、山頂で日の出を見てきた子たちでした。次は海からの日の出を見たい、だったら、せっかくだから日本で一番早い日の出を見に行こう、ということで納沙布岬沖まで行くことになりました。

実際に行ってみた納沙布岬の沖合、日の出を見ようなどという、気楽な海域ではありませんでした。船の操舵室の無線に入ってくる言葉は、ロシア語ばかりでした。周りを走るたくさん漁船、その時舵を取っていた乗組員によると、「みんなロシアの漁船ですよ」とのことでした。GPSで船の位置を細かく確認しながら船長が「ここは日本の領海なんだけどねえ」とつぶやきました。ロシアの漁船は日本の領海に入って操業していたということです。きっと逆もあるのでしょう。近くに船が通ると、普段ならオーイと手を振る子どもたちも、この時ばかりは、黙ってロシア漁船を見つめていました。目の前には北方領土の貝殻島が見えていました。「あの島は今はロシアの島だよ」と言うと、双眼鏡で見ていた子どもの一人が、「人が見える、兵隊みたいな格好をしてる」と叫びました。子どもたちは、代わる代わる双眼鏡で、ロシアの島、ロシアの兵隊を確かめていました。

国境が今そこ、目の前にある、ということ。他の国の兵隊が今、目の前に見える、ということ。漁船の人たちは、国境のぎりぎりのところで作業している、ということ。国土の範囲や隣にある国についても、水産業の様子についても、5年生の時に授業で学習していましたが、渋谷の教室で子どもたちが想像していたこととは全く違う世界が、現実にはありました。授業で学習したことはもちろん正しいことです。しかし、一方で、教室の授業ではどうも知り得ないような現実がある、ということに子どもたち気づきます。

今お話ししたような場面は、どの宿泊行事でも必ずあります。本校の教員は、誰もが、こういう場面に何度も出会っています。子どもたちの思考力や判断力は、こういう場面に出会って深まっていきます。教室の中の学習だけでは、ここまではどうもできません。子どもたちは宿泊行事の中で、教室の中では学ぶことのできない学習をしているということ、教室で学んだ「基礎・基本」を、宿泊行事の中で「活用・発展」させ、「思考力・判断力」を伸ばしていること、まさに、「生きる力を育てる」「アクティブラーニング」の実践です。

これが、宿泊行事の学習面の価値です。

ICT 教育：大学・メーカーとの連携

教育の世界でも IT 化が進んでいます。最近では IT とは言わず、ICT と呼びます。ICT 教育は、ここ数年の間に大きく進み、文部科学省から、全国の小中高等学校に対し、児童用 PC やタブレット端末を用いた授業に取り組むよう、求められています。教室には電子黒板を、児童には端末を持たせ、教材としては電子教科書を用いるように、という計画になっています。

本校では、ICT 機器導入の初期から、ICT 企業の方々と共同で、研究開発を続けております。電子機器メーカーのエルモ社学校教育専門チームには初期の電子黒板から関わっていただきました。また、東芝の PC 専門部門ダイナブック社は、本校のコンピューターシステム作りや授業で使用する PC 端末について担ってくださっています。教科書出版会社最大手の光村図書出版社には、電子教科書やデジタル教材について、そして、マイクロソフト、NTT ドコモ、富士通などの各メーカーには、タブレット端末を児童一人に 1 台持たせるための実験や準備をして頂いています。こういった企業の方々に全面的に協力いただき、ICT 機器を授業で実際にどう使っていくか、そのためには機械にはどのような機能があればいいのか、どのような教材が ICT 教育に適しているのか、逆に ICT を使わない方がいい教材は何か、というようなことも含め、研究、開発をしております。

また、本学、青山学院大学教育人間学部杉本卓教授の研究室の全面的な協力を得て、ICT 機器の授業の中での効果的な使い方の検証も初期より継続しておこなっています。

このように、研究機関の大学・開発するメーカー・そして私たち現場の三者が協同して、教育の ICT 化を進めて行ける本校は、他校にはない恵まれた環境の中にあると言えます。今回の新型コロナウイルスによる休校期間中も、本校は、ICT を利用して、ほぼ通常通りの進捗で授業を進める事ができています。

「初等部の教育内容」というテーマで、説明をいたしました。本校の教育内容にご興味を持っていただき、学校選びの参考にして頂けたら幸いです。